

住まいナビ

ネオ土間、集合住宅にも

家の改修によってモダンな土間を取り入れるケースが、戸建てのみならず集合住宅でも増えている。玄関近くにあり、外と内の境という土間の特徴を生かし、収納や趣味の場にと使い方も自由で多彩。かつての土間とは一味違う「ネオ土間」を住まいに採り入れるコツを教えてください。

「長男(10)、次男(8)が『ただいま』と駆けこんできて、かばんを放り込んだら、スケートボードをつかんでそのまま遊びに出かけることもしょっちゅう」と笑うのは横浜市の佐藤萌さん(33)。子供たちが時に靴も脱がずに入出入りするの玄関から延びるモルタルの土間だ。

室内ではあるがここは半分屋外扱い。靴に傘、キャンプやペット用品など外で使うものがすぐ手に取れるよう棚を両側の壁に設置した。汚れや水気があって部屋に持ち込むには気が引けるものも気にならない。

掃除もほうきで掃くだけと簡単だ。「掃ってすぐに、荷物を一旦置く場所があると本当に便利。泥付き野菜の保存にも重宝」と佐藤さんは土間の使い勝手の良さに太鼓判を押す。

2012年に築30年超の中古団地の一室を購入、全面リノベーションの際に土間をしつらえた。デザインは佐藤さん自身の発案だ。元の部屋を解体し間取りを変更、新たに壁を作り収納棚を備え床をモルタルにして8平方メートルほどの土間が誕生した。改修



モルタルの土間に小上がりを設置—リズム提供

を手掛けたトラスト(横浜市)によると、状況によるが佐藤さん宅ほどの土間改修は30万円からが目安とのこと。間取り変更などの改修はせず、元からある土間をモルタル仕上げにする工事だけなら10平方メートル程度以下では4万円からが目安になる。

「土間があると空間に抜け感が出る」とは同社の矢島崇人さん。玄関は家の顔、ドアを開けてすぐの場所だけに暗かったり狭くて散らかっていたりすると室内の印象まで左右してしまう。土間があると、広がりやゆとりを醸し出すという。

佐藤さん宅のようなモルタル土間はモダンな印象が受けている。モルタルの厚みや塗る時のこてムラなどによって独特の質感も生み出せる。半面、タイルや石などに比べて汚れやすい、下地が乾燥すると収縮しひび割れが起こりやすいのも特徴だ。「ひびや汚れも味のうち」と思えない人にはあまりお勧めできないという。

「半分外で半分内」の特徴はアウトドア系の趣味のスペースとしても最適だ。

東京都の金子倫之さん(36)宅は全面リノベーションしたマンションの1階。玄関ドアから奥のサッシまで続く14平方メートルのモルタルの通り土間には趣味の自転車がずらりと並ぶ。「置き

底冷え対策もしっかり

モルタルの土間は、冬期の底冷えは避けられない。対策としては床暖房や断熱材の設置があるが、床暖房は壊れた時に修理費がかさみがち。断熱材は床下の構造上、集合住宅では設置が難しいこともあるので設計・改修時に相談したい。



モルタル仕上げの土間がある佐藤さん宅(横浜市)

収納や趣味…多彩に活用



土間に趣味の自転車などが並ぶ金子さん宅(都内、写真=中村絵©LIVES)

場としてだけでなく整備やトレーニングもできるスペースが欲しかった」と金子さん。そこで改修を手掛けた一級建築士の石井大吾さんが提案したのが土間プランだ。

自転車を土間奥の窓外まで動かせば携帯シャワーで洗浄もできるし、スタンドに固定してトレーニングも可能。周りの棚には自転車用品やお気に入りの本が並び、「好きなものが詰まった空間ができて家に居るのが好きになった」(金子さん)。

土間、しかも1階というところ冷えそうだが、「冬は若干、寒いのが土間にいる時は基本、体を動かしているのが平気。じっと作業する時は着込めばいいし風がない分、外に比べれば楽なもの」と、気にする様子はない。賃貸住宅でも土間を取り込ん

だ物件がある。リズム(東京・渋谷)が手掛けるワシルーム賃貸の「Doma」シリーズは、モルタル土間フロアに引き出し収納付きの畳敷き小上がりを設置した造りだ。09年に始め、現在17物件を都内で展開する。

同社の挽地裕介マーケティング部課長は「昔ながらの和の良さや今風の雰囲気ミックスしている。土間と小上がりで高さの違う生活空間が2つでき、今までなかったデザイン」と部屋の特徴を説明する。土間にラグを敷いてソファを置くことも、靴のまま暮らすこともでき、家賃は周囲の相場よりやや高めでもこだわりのある暮らしがしたい人に人気という。

魅力あるネオ土間だが、モルタルは防音性が低い建物によっては規約で施工許可が下りない場合もあるので注意したい。石井さんは「土間にしたい場所の下が寝室の場合は難しい」と話している。

(ライター 村樫 裕理子)

自動ドアを抜け、空港のチェックインカウンターに駆け込む。ロサンゼルス行きの飛行機に乗りますと、制服の女性に伝える。手渡したパスポートの赤がやけに鮮やかに見えた。

「お客様、女性が肩間に鞄を寄せる。」「こちら羽田空港です。お客様の便は成田空港からの出発になります。」「そんなバカな。足元が揺らぐ。離着陸を告げるアナウンスと旅行客たちが談笑する声が混合して聞こえた。出発時間まで一時間。どっしりも立ち会わなくてはいけない撮影がある。カウンター越しに詰め寄る。

「まだ間に合いますよ」女性が落ち着いた笑顔を見せる。「成田空港は、この空港の一番右端にあるドアから出れば、すぐ目の前ですから」

そっか。右端のドアだ。慌てて駆け出す。空港内の長い通路には無数

の屋台がずらりと並んでおり、真っ黒な焼きそばや、サッカーボールほどの巨大なたこ焼き、七色に光るりんご飴などが売られている。気づけば空港の中は浴衣を着た旅行者で溢れかえっていて、人混みを掻き分けながら進む。ようやくドアが見えて

黒い十人の男

きた。あの先に成田空港がある。出発まであと四十分。まだ間に合う。息を切らしドアを開ける。

プロムナード

目の前に、アフリカの大地のようなサバンナが広がっていた。遠くにキリンの隊列が優雅に歩き、ヌーの群れが押し寄せて来る。慌てて目の前を通りかかった東京無線のタクシー



ーを止める。ドアがパカッと開く。後部座席には、赤ん坊を抱えた若い母親が座っていた。あの、お客さん乗ってますけど。運転手に伝える。大丈夫です、妻と子供なので気にしないで下さい。彼が無表情で返す。仕方なく母子の隣に座り、至急成田空港へと告げる。タクシーはゆるやかに螺旋状になった山道を登っていく。いつのまに

川村 元気

か、目の前には広大な麦畑が広がっていた。飛行機の出発まで十分を切った。いつまでたっても成田空港は見えてこない。となりで赤子が乳を求めて泣き始める。

ポケットから航空券を取り出す。この理不尽な事態を航空会社に伝えて、飛行機の出発を遅らせてもらおう。券面に書かれた番号に電話をかけようとするが、なぜか読めない。確かに十桁の番号が書かれているのだが、インクが滲んだかのようになっている。焦り、手が震える。ふと誰かに呼ばれたような気がして、窓の外を見た。丘の上、風に揺れる黄金色の稲穂に囲まれながら、黒い十人の男が立っていた。漆黒のタイツで全身を包み、丘の上に直立

している。突然、左端の男が全身で円を描いた。ゼロだ!と僕は気づく。その右の男は体を倒し、数字の4を示す。次の男は7を示す。これが電話番号だ、と僕は悟る。男たちのポーズを目で追いかけて、ダイヤルしていく。0476……いよいよ最後の一桁となる。だが、十番目の男は突然くねくねと体を揺らし、踊り始める。あまりに奇妙な踊りだ。数字は判然とせず、僕は叫ぶ。一体お前は何者なんだ!

目が覚める。繰り返して見る悪夢。いつも同じ空港から始まり、同じ叫びで終わる。見る度に思う。夢のように接続が不条理で、唐突な物語に魅了されている。順接な物語はつまらない。羽田空港のドアの先に成田空港があるような、ありえないけれど、どこかにありそうな世界を描きたいと思っている。(作家)